

## 第2回 FD 研究会 (2011年2月15日開催) ——成績評価の基礎知識——

教授法開発室長 藤 松 素 子

大学全入時代を迎え、入学者の基礎学力不足が指摘され、他方で、大学における教育の質保証問題が取りざたされている。私たちは、質の高い教育を学生の現状に応じた形でいかに提供するのが焦眉の課題となっている。このことは同時に適切な学習評価・成績評価の必要性をも意味するものである。本学においても授業15週の徹底が導入され、シラバスの設計、授業運営とならび、成績評価のあり方については多くの関心がよせられる。

そこで、2010年度第2回目のFD研究会では、「成績評価の基礎知識」と題して、同志社大学圓月勝博教授を講師としてお迎えした教員研修会を開催した。

圓月教授は、昨今の大学における課題が、入口の学生の多様化への対応から出口の教育における質保証に移行していることを指摘した上で、2008年教育審議会答申「学士課程教育の構築にむけて」において、「大学に期待される取り組み」として、「GPA等の客観的な基準を学内で共有し、教育の質保証に向けて厳格に適用する」ことが迫られていることを強調された。それは、国際的に通用する制度たること、アドバイザー制などきめこまやかな履修指導・学習支援を行うことと並び、教員間で成績評価に関する情報を共有し、これに基づくFD活動を実施し、その後の改善にいかすことがより重要なことだという。

そもそも、成績評価制度は多様であり、本学においては100点満点方式に基づく優良制度をとっている。これとGPA制度に制度的優劣があるわけではなく、最も重要なことは、いうまでもなく成績評価基準が明確になっていることなのである。

しかし、この自明なことだと思われる“真実”にブラックボックスが潜んでいると圓月教授は指摘された。それは、「教員は成績評価についての自己点検をしたことがない」からだという。確かに、私たちは日常的に学生の成績不振については議論の俎上にあげることがあっても、その成績の根拠となる成績評価について徹底的な議論をする機会をもつことはあまりない。また、自分自身の成績評価について、シラバス内容から成績提出までのすべての過程において、毎回、客観的な検討を加えておられる方は、それほど多くはないのではないか。

その意味で、圓月教授は「成績について教員が語り合うことがFDの第一歩」とであると強調された。それは、各学部学科における3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）の明確化と、これに基づく学習成果の測定こそが広義のFDであり、3ポリシーを実現するためにFDを実践するからに他ならない。

すなわち、FDの目的は学習成果の向上であり、FDの手段は学習意欲（満足度）の向上であり、成績評価の信頼性向上は学習意欲の向上につながる。そのため、FDの手段の一つは成績評価の信頼性向上なのであると結論づけられた。

しかしながら、成績評価基準の設定は一筋縄ではいかない難しさを有しているのも、また事実である。だからこそ、教員間でたえず議論をし、基準と結果についての情報を共有し、

その全過程についての点検を怠らないようにすることが重要なのである。

本学においては、まず、現状の成績評価制度そのものの議論から始めることが必要ではないかと考える。その上で、全学共通科目および各学部専門科目において、科目の特性、カリキュラム上の位置づけ、科目間の連携等々について各関連部署で議論を重ね、各自の成績評価基準とその評価方法をめぐって、情報交換し始めることが求められているのではないだろうか。

学生にとって最も大きな関心事である成績評価をめぐるこの議論は、次年度の教授法開発室における優先課題として設定する必要があると認識させられた有意義な研修会となった。